
思い出は、時の流れとともに・・・

蒼井 空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想い出は、時の流れとともに・・・

【Nコード】

N4978W

【作者名】

蒼井 空

【あらすじ】

三年前に不慮の事故で両親を失ってから、二人だけで過ごしてきた兄の風見京一かのみききょういちと妹の風見唯かざみゆい。

兄の京一は、たった一人の家族である妹を大切に思い。

そんな兄を妹の唯は、いけないと知りつつも兄としてではなく一人の男性として思いを寄せていた。

しかしそんな二人に、残酷な運命が待ち受ける・・・。

日もすっかり落ちて外も暗くなり、夜も更けた静かな住宅街を、俺はゆっくりとした足取りで自宅へと向かっていた。

俺の名前は風見京一、身長182センチでスリムな体型、そしてモデルと間違われる程の美男子だと自負している26歳の独身男で、地元警察署の刑事課に所属してる刑事をやっている。

仕事が仕事だけに、いつも決まった時間に家に帰れるという訳にはいかない。

そして、ここ数日は事件の捜査で家に帰れず、唯と一緒に過ごす事が出来なかった。

だけど今日は、その事件が解決して久しぶりに家に帰れる。

そう思ったら、俺は少しホッとした気持ちになっていた。

風見唯は、俺にとってたった一人の家族であり、俺とは十も歳の離れた大切な妹だ。

俺と唯は二人兄妹で、両親は三年前に不慮の事故で他界し、それ以来はずっと俺と唯の二人暮らしをしている。

俺が家にいない間は、家の中に一人つきりできっと寂しい思いをしてる事だろう。

俺は歩く速度を少し速めながら砂場とブランコしかない小さな公園の脇を通り過ぎて、その先の丁字路を右へと曲がった。

そして、道路沿いに並んだ家の二軒先に俺と唯の住む家がある。

家は一戸建てで、今は亡き両親が建てた大事な家だ。

この家は、俺が守っていかないと。

俺は自分の家の前まで来ると、玄関の扉の鍵を開けて中へと入った。

「ただいま」

俺がそう言っただけで靴を脱ぎ始めた時、食事の用意をしてくれていたのか、リビングから学校の制服にエプロンを付けた姿の唯が飛び出て来た。

「お帰りっ、お兄ちゃんっ。ご飯出来てるから、一緒に食べようっ」

唯は屈託のない笑顔で、俺にそう言った。

「何だ、俺に構わず先に食べてればよかったのに」

「いいのっ、わたしはお兄ちゃんと一緒に食べたいのっ」

唯はそう言った後、頬をプクッと膨らませて怒っているような素振りを見せた。

時より見せる唯のそんな子供っぽい姿が、俺はいつも可愛いと感じていた。

「そうか、一緒に食べるのは久しぶりだもんな。そんじゃまあ、急いで着替えて来るとするかな」

「うんっ」

「ところで、なあ、唯？」

「なあに？ どうしたの、お兄ちゃん？」

俺は、唯の格好をまじまじと見つめながら

「どうしたのじゃないだろ。何で、今そんな格好してるんだよ？」

「え、だってえ。制服にエプロンって、お兄ちゃん好きでしょ？」

「ば、ばか、何で俺がっ・・・」

唯は両手を広げて、クルツと回った。

その時、制服の短いスカートがふわりと浮き上がって、思わず唯の白いパンツがチラツと見えてしまった。

「ねえ、お兄ちゃん？ どう？ どう？ 唯のこの格好にちょっとは萌えた？」

唯のやつ、満面の笑みを浮かべてやがる。

唯のパンツを見て胸がドキドキしたとは、口が滑っても言えないな。

「まあ、萌えたっていうか。素直に、唯が可愛いって思ったよ」

「ええ？ほんとに!？」

「ああ、俺は嘘なんか言わないよ」

俺が唯を可愛いと思ったのは、決してお世辞とかじゃない。

唯は正直言っつて、何を着ても可愛いと思う。

長い睫毛に真珠のように輝く大きな黒の瞳、桃色に染められたような優しく愛らしい小さな唇、真っ直ぐでさらりと胸元まで伸びた綺麗な黒髪、小柄で細く透き通るように白い肌の手足。

多分、そんな唯を誰が見ても可愛いと思うだろう。

「やったあー！ お兄ちゃんに可愛いつて言われちゃったあー！」

唯は、その場でピョンピョン跳ねて大喜びしている。

「唯、お前も食事の前にちゃんと着替えて来ないと駄目だぞ」

「はーい」

唯はそう言っつて、パタパタとスリッパを鳴らしながら二階へと上がって行った。

そんな唯の後ろ姿を見て、あいつもまだまだ子供だなと思いつながら、俺自身も二階にある自分の部屋へと向かった。

【Part・1】（後書き）

下手な文章で申し訳ありませんが、こんな小説を読んで頂き有難うございます。

この作品は、元々ネトラジの放送で掛け合いをやって頂いた台詞を小説に作り直したものです。

更新は作者の都合上遅くなると思いますが、引き続きこれからもこの作品を読んでいって頂けると嬉しいです。

【Part・2】

部屋着に着替え終わった俺と唯は、リビングに置かれたテーブルの椅子に座って、二人仲良くテーブルの上に置かれた焼き魚やお味噌汁、そしてゴボウとニンジンとキャベツの炒め物といった唯の作った和風の料理を食べ始めた。

「なあ、唯？」

「なあに？ お兄ちゃん？」

「お前、料理が上手くなったな。唯の作ってくれた料理、凄く美味しいよ」

「や、やだっ、急にそんな事言うなんて。もう、お兄ちゃん恥ずかしいよっ。でも、お兄ちゃんに喜んでもらえて良かった」

唯はほんのりと頬を赤らめて、恥ずかしそうにしながらも笑顔でそう言った。

三年前の事故で両親を失ってから、家の事は殆ど唯に任せっきりになっちまったからな。

「唯、ごめんな。家の事、全てお前に任せちゃって・・・」

今、こんな事を言ったら、楽しい食卓がしんみりとしちまう事は分かっていたのに・・・。

唯に対して申し訳ないという思いが強すぎて、ついつい声に出し

てしまった。

「大丈夫だよつ。わたし、お料理もお洗濯もお掃除も大好きなんだもんつ。だから、今まで辛いとか大変とかなんて、一度も思った事なんか無いよ」

唯は明るく、元気な言葉でそう言ってくれた。

その言葉が、唯の本心なのかは俺には分からない。

だけど、唯の俺を思う優しさは凄く伝わった。

唯のそういった言葉や優しさが、いつも俺の疲れた心と体を癒してくれる。

「それより、お兄ちゃんの方こそ無理をしないでね。刑事の仕事って危険だし、大変なんですよ？」

俺が唯の心配をしてたはずなのに、いつの間にか逆に唯が俺の事を心配している。

まったく、これじゃあどっちが年上なんだか……。

「バカだな、俺の事は心配しなくていいんだ。お前が結婚して幸せになるまで、俺は絶対倒れたりなんかしないよ」

「わたし……結婚なんかしなくてもいい……。ずっと、お兄ちゃんと一緒にいられるなら、それだけで幸せだもんつ！」

そんな風に言ってくれた、唯の気持ちは凄く嬉しい。

でも……。

だけど……俺たちは……。

「俺は……。俺なんかじゃ、お前を幸せに出来ない……」

「何で？ 兄妹だから？ そんなのやだよ……。そんなの嫌……」

明るく元気だった唯の顔が、今にも泣き出してしまいそうな程の悲しみを帯びた表情に変わっていた。

そんな唯の顔を見るのが、とても辛い……。

でも……。だからといって……。

「心配しなくても、お前を大切にしてくれる、幸せにしてくれる奴がきつと現れるさ……」

本当は、こんな事を唯に言いたいんじゃない。ただ……今の俺には、これしか……。

「何で、そんな事を言うの？ わたしは、お兄ちゃんがいいの……お兄ちゃんじゃないとダメなの！ 何で、わたしの気持ちを分かってくれないの！？ お兄ちゃんなんて嫌い！ 大っ嫌い！！！」

唯は泣きながら、リビングを出て行った。

悲しみに満ちていた唯を、俺は追いかける事が出来なかった……。

唯……ごめん……ごめんな。

大切な妹を泣かせるなんて、本当にダメな兄貴だな……。俺は……。

胸の奥が痛かった。

これでいいんだと自分に言い聞かせる程、その痛みも増していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4978w/>

思い出は、時の流れとともに・・・

2011年11月10日00時12分発行